

## 過去の治療データの調査研究への使用のお願い

高齢者大腿骨近位部骨折に対する多職種による2次骨折予防の取り組み

— 取り組み前と何が変わったか —

Multidisciplinary approach to prevent secondary fractures after geriatric hip fractures

- What have changed after this approach? -

兵庫県立西宮病院 整形外科<sup>1)</sup> 四肢外傷センター<sup>2)</sup>

正田悦朗<sup>1)2)</sup>、赤羽志保<sup>1)</sup>、北田真平<sup>2)</sup>、平瀬仁志<sup>2)</sup>、円山茂樹<sup>1)</sup>、高田佑真<sup>1)</sup>、黒澤堯<sup>1)</sup>、黒島康平<sup>1)</sup>、蒲地正宗<sup>1)</sup>、雲井洋文<sup>1)</sup>

### [目的]

高齢者の大腿骨近位部骨折では、近年、リエゾンサービスをはじめ、多職種での二次骨折予防が行われるようになってきている。当院でも2019年1月から活動(Nishinomiya support service of Prevention for secondary Osteoporotic Proximal hip fracture: N-POP)を開始した。本研究の目的は、開始前と比べてどの様な効果があったかを調査することである。

### [研究デザイン]

症例対照研究(ケース・コントロールスタディ)

### [方法]

N-POP導入前の2018年1月～12月に手術的治療をおこなった65歳以上の大腿骨近位部骨折69例(control:C群)と導入後の2019年1月～12月の79例(N-POP群)を対象とした。手術までの期間、入院期間、退院時および外来受診時の骨粗鬆症薬投与の有無、外来受診状況、新たな骨折発生状況を調査し、t検定及び $\chi^2$ 二乗検定で比較した。有意水準は0.05とした。

### [結果]

手術までの期間はN-POP群が平均1.5日、C群は1.8日で、入院期間は28日、31日であった。退院時の骨粗鬆症薬投与はN-POP群71例、C群14例で有意差を認めた( $p < 0.001$ )。退院、転院後に外来受診歴のない症例はN-POP群11例(死亡3例)、C群11例(死亡2例)であった。外来での骨粗鬆症薬投与はN-POP群68例中64例、C群58例中18例で有意差を認めた( $p < 0.001$ )。新たな骨折は、N-POP群(66例)で10例、C群(45例)では5例に発生していたが、有意差はなかった( $p = 0.521$ )。

[結論]

N-POP 群では、退院時に 90%の患者に骨粗鬆症薬の治療が行われており、外来での治療も継続して行われていた。しかし、手術までの期間、入院期間に差はなく、新たな骨折は、N-POP 群でも十分には予防できていなかった。